

平成19年度卒業式

卒業証書・学位記授与式によせて 学長告辞



本学の学部で4年間勉学に励まれて、今日、ここにめでたく学士の課程を修了されたみなさん、ご卒業おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。今日は朝から雨が激しく降っていましたが、ちょうど今、まさにみなさまの前途を祝うように雨も止み、静かな卒業式を迎えることができました。517名の卒業生の新たな出発に際して、ほころび始めた中庭の桜と共に、この喜びを分かち合いたいと思います。

また、みなさんをここまで支えてこられたご家族をはじめ、来賓の方々、本学に暖かいご支援をお寄せ下さいます多くの方々に、深くお礼を申し上げます。

みなさんは4年前にこの微音堂で入学式を迎えたことを覚えておられるでしょう。その時、本田和子前学長がみなさんの入学をお祝いで告辞を述べられたことと思います。

本学は明治8年、1875年に東京女子師範学校として創立され、本年は創立以来133年目となります。本田前学長は本学始まって以来の最初の女性の学長です。日本で最初にできた、女性のための高等教育機関であるお茶の水女子大学であっても、女性が学長になるには、126年という年月が必要でした。

今日は卒業式のおめでたい日であると同時に新しいスタートの日ですが、本学の歴史や、本学が国内だけでなく海外においてどういう位置づけにあるかということについて、お話をさせていただきたいと思っています。

「夢の実現に向けて真摯に学ぶ意欲のあるすべての女性のために存在する」という、本田前学長が掲げた理念に加え、私は本学の教育の目的について、「21世紀を生きるリーダーシップを身につける」ことだと、度々申し上げてきました。このように女性のリーダーを育成する大学の学長が男性であるのでは、リーダーシップを育成することを教育の目的とする大学の存在そのものが疑われます。本学の学長が女性であることの必要性は、ここにあります。

本学は創立以来、優れた女性を数多く世に送り出してきました。さかのぼれば、日本で最初の女医、あるいは最初の理学博士など枚挙に暇がないほどです。こういった歴史の詳細はお話しませんが、本学の歴史が日本国内だけでなく、海を越えた物語に繋がっていることを、つい最近、知ることができました。



現在、本学は世界の33の大学と大学間協定を結び、学生の交換留学や共同研究などを行っています。そして先月2月22日に、本学最初の海外拠点をタイの首都バンコクに開設することができました。

お茶の水女子大学バンコク・オフィスは、日本学術振興会のバンコク研究連絡センターの中にあります。このオフィスを拠点にして、東南アジア諸国への情報発信や、留学生の募集だけでなく、東南アジア諸国における本学卒業生、あるいは大学院修了生のフォローアップやネットワークの強化、新たな国際協力と国際共同研究の企画立案、女子教育、女性研究者協力の充実などを進めていくつもりです。

本学とタイの関係は古く、記録によると海外から本学への最初の留学生はシャム——現在のタイの4名の方です。今から100年以上前の明治36年のことです。お一人は途中でご病気になり帰国されたようですが、残りの3名は本学の前身である東京女子高等師範学校の寄宿舎に入って4年間勉学に励まれ、卒業後、タイに帰国されたということがわかっています。

また、東京女子大学の学長も務めた本学の卒業生である安井てつさんは、タイ王妃のお招きにより皇室女学校の開校に尽力されています。

これらの事実を知った私は、シャムからの留学生が帰国後どのような道を歩まれたのか、安井てつさんが創立された学校は現在どうなっているのか、知りたいと思っていました。

そこで、バンコク・オフィス開設にあたって手がかりを探したところ、安井てつさんが創られた学校が今も存在していることがわかり、幸いにもその学校の理事長と校長先生にお会いすることができたのです。

(次ページへ)

平成19年度卒業式

卒業証書・学位記授与式によせて 学長告辞

平成19年度卒業式

卒業証書・学位記授与式によせて 学長告辞

(前ページより)

安井てつさんが三年間をかけて創立にご尽力された学校は、王宮のすぐ近くにあるラーチニー女学院という大変由緒ある学校でした。とても綺麗なキャンパスで、驚いたことに敷地内に幼稚園から高等学校までがあり、本学とそっくりなつくりです。学生一人ひとりに丁寧な教育をし、卒業生の多くは名門校に進むという点でも本学と似通っているようでした。

校長先生と理事長—どちらも女性です—に、シヤムから来た本学最初の留学生のことについてお尋ねしたところ、学校の図書館にご案内いただきました。そこで一冊の本を紹介されたのです。その本は4名の留学生のうちのお一人、ジョン（正式には、クンジン・カジョン・パラトラーチャ）さんという方のご遺族が追悼集として書かれた伝記のようで、寄宿舍での生活や日本画を描いておられたこと、三週間の船旅で東京へ来たこと、雪を初めて見たことなどが書かれています。本学にも残されている4名の留学生のお写真のほか、日本で撮られたたぐさんのお写真も載っていました。そして、本学を卒業したジョンさんは、ラーチニー女学院で教鞭をとられたこともわかりました。



このように、本学への留学生がご自分の国に帰られて、女子教育の発展のために尽くされ、また国と国を結ぶ橋になられたことには、大変感銘を受けました。

そして現在でも、本学を卒業後、東南アジア諸国で働いている方々は大勢いらっしゃいます。バンコク・オフィス開設に際しては、タイ国内は言うに及ばず、国境を越えてラオスやベトナムからも沢山の卒業生が駆けつけてくれました。これらの先輩方のように、みなさんも世界にはばたくお茶大生として活躍していただきたいと思います。

さて、みなさんが入学されたときに、国立大学は国立大学法人になりました。この4年間で、国立大学はずいぶん変わってきています。

その反面、変わっていないこともたくさんあります。その一つは、女性学長の数です。

現在86の国立大学がありますが、学長が女性である国立大学は本学のみです。一方アメリカでアイビーリーグ校と呼ばれている大学の半数は現在女性の学長ですし、ハーバード大学、MITをはじめ、著名な大学では次々と女性の学長が誕生しています。このことと比べますと、日本はまだまだ意思決定の場で女性が本当の意味で実力を発揮できる状況には至っていないと思います。女子大学だから女性の学長というのではなく、共学の大学にも女性の学長が増えていくことを望みます。

では女性の副学長がいる大学はいくつあるのでしょうか？

本学に2人、東京学芸大学に1人、静岡大学に1人、宮崎大学に1人。現在は合計4校に5名の女性副学長がいらっしゃいます。

先に申し上げた5名の女性副学長のうち、4名は本学の卒業生です。これは本学の女性リーダー育成という目的が実を結んでいる証のひとつであるといえるでしょう。

みなさんも本学で勉学に励まれた4年間ですでに感覚として気づいていることと思いますが、女性だけで切磋琢磨できる環境を体験することによって、のびのびと自分の可能性を伸ばすことができます。こうした環境で育った人は、男女が同席する場においても、物怖じすることなく発言することができます。



本学で身に付けた生き方は、社会に出た後、もしくは進学後、必ずいつか芽が出ます。ですから、この4年間でみなさんが伸ばしてきたご自分の可能性を大切に、開花させていっていただきたいと思います。

現在世界には女性が大統領や首相である国もたくさんあります。そのような状況であるからこそ、本学は日本の女性教育の拠点というだけでなく、世界的な女性教育の拠点の一つとして今後も存在し続けたいと思っています。

これからの大学は、18歳の人たちだけが入るところではなくなるというのが私の考えです。いつでも学びたいときに学びたい人が来て学べる大学、そういう大学であってほしいと思っておりますし、大学院においてもその思いは同様で、すでに本学の大学院、特に博士課程は再度大学への入学を望む社会人への門戸を広く開いています。

みなさんがこれから社会に出て、ふたたび大学で学びたい、いままで学んできたことではない分野を学びたいと思ったときには、いつでも大学院にお迎えします。

また、本学には桜蔭会という同窓会があります。私自身も大学を卒業後、いろいろな場面で桜蔭会のご縁によって助けられることができました。本学の卒業生は、国内は言うまでもなく、世界中に広がっています。もしもみなさんが困ったとき、あるいは困らないときでも、どうぞ積極的に卒業生のネットワークの中にお入りください。

昨年からはホームカミングデイも行っております。本学を巣立たれた後も、是非母校を思い出していただき、先輩や後輩達とのつながりを続けていっていただきたいと思います。

みなさまがたの前途に幸いが多くありますように、そして是非ご自分の手でその幸いをつかみとっていただきたいと思います。

これをもちまして、わたくしのお祝いの言葉とさせていただきます。 (了)

平成19年度卒業式

卒業証書・学位記授与式によせて 学長告辞